

日本国内で見られるチョウのうち、このコメジャノメほど内気で太陽光のもとに姿をみせない恥ずかしがり屋はいないと思われる。確実な生息分布は、九州から岩手県中部までで、南西諸島にも産しない。加古川市の近郊に多くはないが生息していて、暗い林内でひっそりと遊んでいる光景を何度か目にしながら、人の気配に敏感で、その都度カメラを向けて構図を狙う間もなく飛び去られ、撮影記録をとれない唯一の普通種として時ばかりが過ぎていた。

2013年9月14日、郷里の高知市五台山に数年ぶりに帰省するチャンスを得て、チョウ観察ができる時間をたっぷり取るべく、滅多に利用しない三宮からのJR西日本夜行バス便で、早朝6時過ぎに高知市はりまや橋に降り立つ。少ない本数で市内から五台山公園までのバス便があるけれど、それで山に入るのはあまりに早すぎる。距離にして約5kmは徒歩でゆっくり向かうのに決して遠い距離ではなく、途中、マクドナルドに立ち寄ってのんびりと朝食タイムをとる。慣れない夜行バスで熟睡ができていない頭を熱いコーヒーですっきりさせると足取りは軽い。

五台山公園は、四国八十八か所遍路めぐりの31番名刹竹林寺と、牧野富太郎博士に因む牧野植物園の存在が有名で、観光地として車が一方通行道路を頻繁に走るが、独鈷水という弘法大師

が独鈷を投げて清水が出たという伝説のある深い林へとつながる道があることを知る人は、もはや少ない。その林にはヤマビワが多く、スミナガシやアオバセ



セリの発生地で、路傍に多いススキを食草とするクロコノマチョウやホソバセセリもみられる。山全体にカシ類などの広葉樹が多く、ムラサキシジミやムラサキツバメが豊産することでもよく知られた、1956-62年は間違いなく昆虫の宝庫であった。しかし、近年、観光道路以外に人が通らなくなって林内と旧生活道路は荒れ放題で、この存在すら知らない人がほとんどだろう。

独鈷水のうっそうとした林内は、暑い夏場だと涼を求めるモンキアゲハがこの林道を蝶道にして飛び交い、イシガケチョウやスミナガシにも出会える格好の場所なのだが、この日早朝の探索



ではチョウ影がない。鹿の段へと続く山道を登る途上、陽光が届き始めている草原手前の暗い林床でコジャノメが遊んでいる。すぐに飛んで逃げるのをそっと追いかけて、緑

の葉上に静止したところをようやく撮影記録。本種の撮影を目標としてからゆうに10年は経過しており、その安堵感と喜びはひとしおだ。この日、1962年頃には室戸岬まで遠征しないとみられなかったヤクシマルリシジミの姿に驚くが、少なくとも2009年以降ここでは普通にみられるようになっているようで、

2000年頃から見られるようになったサツマシジミ同様、地球温暖化の影響に違いない。いろんなチョウとの再会を楽しんで五台山の麓にある実家に寄って行こうと



下る旧山道で、最後に見送ってくれるのが再びコジャノメだというのがうれしい。